19. 甲状腺腫瘍の Tl-201 シンチグラフィ delayed scan の有用性について

千賀　脩　宮川　信　横沢　保
小林　克　菅谷　昭　飯田　太
（信大・二外）

甲状腺腫214瘍例に対し，^{201}Tl-chloride シンチを施行し delayed scan の有用性について組織像と対比して検討した．甲状腺癌121例中 early scan で109例 (90.1％), delayed scan 96例 (99.3％) に陽性像が得られた．特に分化型の癌に強く集積されたが，delayed scan 陰性例もあり，これらの組織像をみると，(1) 腫瘍が小さい，(2) 硝子様変性が強い，(3) 線維化が強い，(4) 細胞の異型性が弱いことが判明した．一方，腺腫では 67 例中 early scan 18例 (26.9％), delayed sascan 9 例 (13.4％) の陽性像を示した．early scan での陽性例は大部分が管状腺腫および索状腺腫であるが，特に管状腺腫では delayed scan にて陰性になる症例が多い．管状腺腫の delayed scan 陽性を示す例の組織像では，(1) 細胞異型がみられる，(2) 硝子様変性が少なく実充性である，(3) 胞体の好酸性化がみられることが考えられ，また索状腺腫では全例 delayed scan 陽性を示し，これら delayed scan 陽性を示す腺腫は術後厳重に follow up すべきである．

20. 甲状腺癌の ^{131}I 治療における問題点

宮川　信　千賀　脩　横沢　保
小林　克　菅谷　昭　飯田　太
（信大・二外）

目的：遠隔転移を有する甲状腺癌の治療として分化型の腺癌では ^{131}I 治療が重要な治療法である．今回は ^{131}I 治療に対する問題点をわれわれの症例から検討した．症例：1953年から1981年までの29年間に取り扱った甲状腺癌症例は 849 例で，^{131}I 治療を行ったのは21例である．

そのうち有効は13例で，なかでも著効を示した症例は2例でいずれも濾胞癌で骨に転移した症例である．　問題点：1) 治療効果判定．2) 正常甲状腺組織の切除の問題．3) ^{131}I 投与の時期の問題．4) ^{131}I 投与の前処置としての問題．5) ^{131}I 治療の再治療の時期の問題．以上について考察を加えた．　結論：1) 分化癌のなかでも濾胞癌が有効である．2) 転移部位は肺より骨の方が有効である．3) 正常甲状腺組織を出来るだけ切除しなければならない．また切除後3週間位の期間を置いて ^{131}I 投与を行う方が有効である．4) ^{131}I の摂取は TSH が高い方が有効である．したがって，投与前 TRH の投与をすすめる．5) 大量の ^{131}I が有効である．

21. ^{111}In 標識白血球による Brain Abscess の検討

宇野　公一　植松　貞夫　三好　武美
岡田　淳一　有水　昇　（千葉大・放）
山浦　晶　（同・脳外）
内山　暁　（山梨医大・放）

頭蓋内感染巣を疑った20症例 (7～70歳) に ^{111}In 標識白血球イメージングがなされた．患者自己白血球に ^{111}In-oxine 0.5～1 mCi で標識し，再投与後24時間で撮像したが，場合によっては数日経ってから撮像した．このイメージングで 8 例が陽性像を呈した．これらのうち5例は頭蓋内感染巣を示し他の 3 例は肺や胃の癌転移巣を示した．中耳炎による小脳膿瘍の 1 例は ^{111}In 標識白血球でモニターしながら保存的に治療が可能であり，先天性心疾患の女児の脳膿瘍は抗生剤やステロイドの治療の効果をある程度観察できた．本法は診断法として頭蓋内感染巣を描出でき有効であるのみならず，治療の選択や治療の効果判定や経過観察に有効であることが示唆された．

22. 胸腺ホジキン病の術前核医学的診断および組織型について

杠　英樹　森本　雅己　井之川孝一
大橋　昌彦　疋田　仁志　飯田　太
（信大・二外）
中西　文子　（同・放）
丸山　雄造　（同・附属病中央検病理）
志田　寛　（飯田市立病院）

縦隔腫瘍のうち胸腺ホジキン病は本邦では稀な疾患とされているが，われわれは特異な組織型を示した 2 例を含む本症の 3 例を経験したので，術前の核医学的診断および治療について報告する．

症例 1 は45歳，男性で左鎖骨上窩の生検により，確定診断が下され，放射線照射後手術を行って，胸腺ホジキ

Presented by Medical*Online